

グループ討議研修レポート

C 班第 2 グループ「プロジェクト Y」

■課題（問題）の発見

自己紹介に続き、各大学で抱えている身近な課題を話し合った。課題として、学内ネットワークを利用する際、ガイダンス（説明会）を受けないとパスワードを発行しないなどの取り組みをし、ルール遵守の誓約書も提出させているにも関わらず、パスワードを忘れて再発行のために窓口に来る学生が多いという現状が最初に提示された。他大学からも、履修確認期間に履修内容の確認を促しているにもかかわらず「何かあってもあとでどうかなるだろう」的な学生が結構存在するという報告もあった。はたして学生は主体性を持ち、能動的に学生生活を送っているかどうかを検討したところ、各大学において自分の状況をつかめていない学生や、他人任せで誰かが何とかしてくれるだろうと考えている学生が増加傾向にあるとの結論に至った。学士力が問われている中でグループの全員がその課題の深刻さを認識した。

■課題の解決へ向けて

課題の解決策を探る前段階において、まず初心としての各大学の建学の精神と教育方針等を各自で確認した。その後、課題解決につながるグループのテーマ（目標）について議論した。結論として「自立心あふれる学生を育成する～学生を成長させるための情報ツールの活用～」というテーマを設定した。このテーマに基づき改めて現状の課題について、学生側だけでなく、教職員側の観点からも含めて話し合ってみた。学生側の課題は先述した主体性のなさであり、教職員側の課題は、相談窓口（機会）の不足、低単位学生への対応の不十分さといった学生支援の不足や、教員と職員との情報共有による協働が十分にできていないことができた。

このように課題の整理ができたところでテーマについて具体的な議論を行った。まず「自立心あふれる学生とはどのような学生なのか」ということを考える必要がある。そこで、自立心あふれる学生を、「感覚的に PDCA サイクルをまわし目標を達成できる学生」と定義付けた。このような学生を育成するための方法として、Web やデータベースといった情報ツールを活用して支援できないか、議論を進めていくことにした。そうした議論の末、グループで考案したのが「やる木満々プログラム」である。

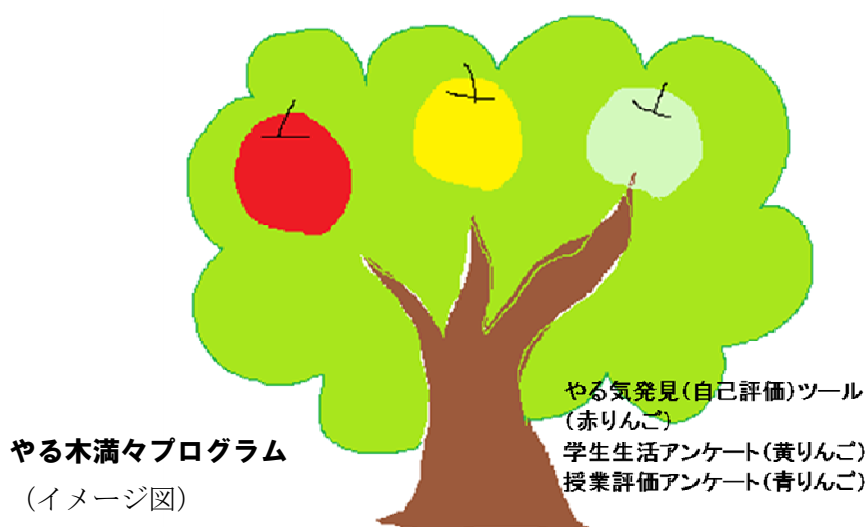
■解決策「やる木満々プログラム」の提案

「やる木満々プログラム」とは、Web 上で自己評価や自己分析、学生生活アンケートや授業評価などができるプログラムである。自分の成長を実のなる木にみたと、各コンテンツの進行状況に応じて画面上の実が熟していく仕掛けになっている（イメージ図参照）。

この「やる木満々プログラム」は、学生に対して入学時に、感覚的に PDCA サイクルを

身につけるための第一段階としての意識づけ（講義として年間の活動に組み込む）を行い、自分の現状を把握してもらおう。次に学生は自分なりの行動計画を立て（PLAN）、その計画に基づき行動してみる（DO）。その後、行動の結果について学生は Web 上で自己評価を行い、教職員との面談の機会（年1回）を設定し助言をもらう（CHECK）。最後に計画を改善（修正）する（ACTION）。学生はこれらの一連の流れを卒業まで数回経験することになる。自己の成長が記録され、ふりかえることで、行動に対する気付きが得られることを期待したい。学生の自発的な目標達成への取り組みが喚起され、自立心あふれる学生への成長を促すことができる。そして入学時の意識づけや教職員との面談により、相談窓口（機会）の不足や低単位学生への効果的な対応といった、学生支援の充実を図ることが可能になる。また、このプログラムによって取得した学生の情報を一括して管理することとし、部署間はもちろん、教員と職員の間での情報共有を実現し、教職員協働の効果的な学生支援も可能となる。

「やる木満々プログラム」によって学生側および教職員側双方の課題の解決を図るということは、大学全体で PDCA サイクルをまわすことにつながり、学生だけでなく教職員もともに成長していくことを意味している。



■まとめ

討議を通じてどの大学でも主体性がなく受動的な学生が多くなっているという課題を共有した。社会へ出て活躍できる人材になるためには、大学での学びや課外活動等をおしりて自立心あふれる学生に成長することが必須である。この成長を促すためには教職員自身もともに成長し変化していかなければならない。今回の討議では成長するための手段として自己評価（分析）、PDCA、情報ツールをキーワードに解決策を模索し立案した。

本研修の講義と討議で得られた成果を基として、今後の業務における短期的課題から長期的課題まで、新たな解決策を立案・実践し状況改善の努力を日々重ねていきたい。

以上